
 学 会 記 事

第28回新潟画像医学研究会

日 時 平成4年10月31日(土)
午後2時～6時
会 場 県立がんセンター新潟病院
2F講堂

I. 一般演題

1) 老年期痴呆患者の両側鉤間距離
—MRIによる検討—

羽生 春夫・杉山 壮
阿部 晋衛・小林 康孝 (立川総合病院)
立川 信三・勝沼 英字 (表町病院内科)

老年期痴呆患者の側頭葉内側面の萎縮を簡便に評価するため、MRIによる水平断像から両側鉤間距離を測定した。アルツハイマー型痴呆の鉤間距離は 34.2 ± 2.3 mmで、脳血管性痴呆の 29.5 ± 2.7 mm、健常老年者の 26.0 ± 2.3 mm に比し有意な拡大がみられた。特に健常老年者とは1例のオーバーラップもなく完全に鑑別可能であった。脳血管性痴呆やその他の痴呆患者(パーキンソン病、正常圧水頭症、ヘルペス脳炎、低酸素性脳症)でも鉤間距離は健常老年者に比し拡大傾向を示した。鉤間距離の測定は海馬、海馬傍回、扁桃体などの萎縮を間接的に評価でき、適性な水平断層が得られ測定すべきスライス面が一定であれば簡便な定量的評価法と考えられる。本検討から老年期痴呆患者の診断、殊にアルツハイマー型痴呆の補助診断の一つとして有用であり、実際の臨床応用に適すると考えられた。

2) Tolosa-Hunt 症候群のMRI

高橋 祥・小股 整 (水原郷病院)
今野 公和 (脳神経外科)

近年 Tolosa-Hunt 症候群(以下 THS)を海綿静脈洞に局限した true THS と、副鼻腔炎等を伴った THS variant に分類する傾向にある。我々は2例の THS(内1例は生検で肉芽腫を確認)を経験しそのMRI像について検討した。症例1:68才男性。経過中転移性腫瘍も否定しえず、また Steroid に対する反応も乏しく、開頭生検を行い肉芽腫であることを確認、その後脳神経症状は徐々に改善。症例2:59才女性。典型的な脳神経

症状は Steroid に良く反応し全快。以上2例ともMRIでは蝶形骨洞炎を伴っていることが判明した。

症例1は Steroid の著効しない症例で、画像上も THS variant であったが、組織学的に true THS を証明しえた症例であり、症例2は症状経過からは true THS であったが、画像上は THS variant であった。以上より画像上で THS を true, variant と分類するよりMRIを詳細に検討して副鼻腔炎が合併しているかどうかを確認し、その結果を治療に反映すべきと考えられた。

また THS で海綿静脈洞部から直接組織確認を行えた症例は少なく、我々が渉猟しえた範囲では12例のみである。またこの中でMRIの報告があるのは我々の症例のみであり、貴重なケースと考えられ報告した。

3) Posterior scleritis の CT 所見

岡本浩一郎・伊藤 寿介 (新潟大学 歯科)
登木口 進 (放射線科)
古澤 哲哉 (新潟大学放射線科)

Posterior scleritis(以下 PS)は、1902年に Fuchs により初めて報告された後部強膜の炎症性疾患の総称であるが、その後の報告例も少なく比較的稀な疾患と考えられていた。しかし超音波やX線 CT により後部強膜の病変が直接描出されるようになり、報告例が増加しこれら検査法の重要性が認識されてきている。今回我々は PS と診断された2症例につき CT 所見を中心に呈示し、idiopathic inflammatory orbital pseudotumor(以下 PsT)との関連性につき検討を加えた。1例は造影効果を示す後部強膜の肥厚を示し、PS に特徴的といわれている所見であった。他の1例は多彩な眼窩内の所見を示し、PsT と考えられるようなものであった。PS は PsT の一型であり、眼科的に捉えられるものであると考えられた。

4) 蝶形骨洞部脊索腫のMRI所見

増田 浩・外山 孚
小泉 孝幸・小林 勉 (長岡赤十字病院)
酒井 雅史 (脳神経外科)

症例:55歳男性。複視で発症。左嗅覚低下。左動眼神経不全麻痺、左外転神経麻痺を認め、頭蓋単純写でトルコ鞍～斜台骨非薄化を、トルコ鞍断層撮影で後床突起～斜台の骨破壊像を認めた。CT では斜台～蝶形骨洞内の low density mass を認め、造影剤ではほぼ均一に増強され、bone window で斜台骨破壊著明、内部に点状の石灰化像あり。MRI で内部が不均一な T1, T2 の延長をみる mass が蝶形骨洞内からトルコ鞍、一部篩骨洞、

鼻腔に進展，内部に点状の無信号域を認めた。Gd 増強 T1WI では強い増強効果を認め，矢状断像で軽度の脳幹の圧排を，冠状断像で海綿静脈洞への進展も認めた。また T1WI で斜台骨髄内脂肪を示す高信号は消失。脳血管撮影では異常血管陰影認めず。以上より，斜台から蝶形骨洞へ進展した脊索腫の診断で摘出術施行。病理診断 chordoma。術後残存腫瘍に対し放射線照射中。

斜台部脊索腫の MRI 所見，鑑別診断について，下垂体腺腫，蝶形骨洞膿嚢胞の MRI を供覧し，文献的考察を加え報告した。

5) 臨床的に顎関節症を疑われた悪性腫瘍の 3 例

加藤 徳紀・小日向謙一
林 孝文・中山 均 (新潟大学歯科)
中村 太保・伊藤 寿介 (放射線科)

今回，我々は開口障害を主訴として本学口腔外科を受診され顎関節症の診断で，それに準じた治療を受けた悪性腫瘍を 3 例経験したので報告する。3 例とも 50 歳前後の男性で，15 mm 前後で運動痛の為開口障害を訴えたが，顎関節症に頻発する TMJ 部の雑音，自発痛等は認められなかった。又，単純 X-P に於いても顎関節部に骨変化は認められなかった。顎関節症の臨床統計データによると，これらの所見は発現頻度としては非常に低く他の疾患を疑い得るものであった。さらに画像的にみても，パノラマ写真では翼口蓋窩・翼突板に異常像が認められ，この時点で悪性腫瘍を疑い得るものであった。今回の 3 例を含め，開口障害を伴って上顎部に及んだ悪性腫瘍 6 例の内，5 例は CT 上で外側翼突筋への腫瘍の進展が認められた。さらに，その 5 例すべてに於いて三叉神経第 2 枝，3 枝の知覚異常を認めた。又，今回のように開口障害を伴った悪性腫瘍の診断に CT が非常に有効であった。

6) 唾液腺腫瘍における CT と唾液腺造影所見の検討

外山三智雄・高瀬 裕志 (日本歯科大学新潟)
平山 昭平・二宮 秀一 (歯学部歯科放射線)
江口 徹・前多 一雄 (学教室)

唾液腺腫瘍の CT 所見と唾液腺造影所見を retrospective に検討し，良性腫瘍と悪性腫瘍について比較した。

対象は，過去 11 年間に，CT，唾液腺造影検査を施行され，病理組織学的に唾液腺腫瘍と確定された男性 14 名，女性 6 名，平均年齢 54.5 歳，耳下腺 11 例，顎下腺 9 例

の計 20 症例で，確定診断の内訳は良性腫瘍 14 例，悪性腫瘍 6 例である。

その結果は以下の通りである。

1) 良性腫瘍の CT 所見では，内部均一な像を呈するものが多かった。

また，造影所見では，圧排像がほとんどの症例で認められた。

2) 悪性腫瘍の CT 所見では全例が境界不明瞭な像を呈していた。

また，造影所見では，良性腫瘍で認められなかった断絶，漏洩所見を呈するものがあつた。

7) 結節性甲状腺腫の超音波診断における簡素化の試み

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
新妻 伸二 (新潟病院内科)
朱 紅 (同 放射線科)
(黒龍江省中日友好病院超音波室)

手術で確診した甲状腺腫瘍 169 例 (悪性 81 例，良性 88 例) の超音波所見を読影し，各種所見の良悪の出現頻度を調べた。カイ 2 乗検定で両者に $p < 0.0001$ の有意差のあつた項目は，低エコー，腫瘍内の輝点，嚢腫内乳頭状隆起の 3 項目が悪性に多く，ハロー，嚢腫形成の 2 項目が良性に多かった。

超音波診断の簡素化をはかるため，この 5 項目をスコア化し，その診断能をみた。低エコー + 1，輝点 + 1，嚢腫内隆起 + 1，ハロー - 1，嚢腫形成 - 1 と配点し，各症例の超音波スコアを算出した。+ 1 以上は，悪性 81 例中 70 例，86.4%，良性 88 例中 12 例，13.6% であつた。この超音波スコアの診断能は，感度 86.4%，特異性 86.4%，正診率 86.4% と，いずれも良好であつた。これらは組織型別でも差がなく，濾胞癌の感度も 78.6% と高率であつた。

甲状腺腫瘍の良悪鑑別の診断能は，正診率の面で，シンチ，ABC を上まわつた。

8) 小児にみられた肝 focal nodular hyperplasia の画像所見

加村 毅・椎名 真
木村 元政・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

肝の focal nodular hyperplasia (以下 FNH と略す) の 2 小児例を経験した。1 例目は 8 歳女児。US では右葉の径 7 cm の均一な高エコー腫瘍で，単純及び造影 CT では均一な低～等濃度域であつた。肝シンチでは周囲肝